

# 研究所だより

第35号

社会福祉法人日本保育協会 保育科学研究所

## はじめに（研究所事務局から）

今回の本誌は大きく3点を掲載している。

まず1つ目は、巻頭として令和3年7月に当協会保育科学研究所所長に就任した五十嵐 隆先生のあいさつを掲載した。

2つ目は、令和3年度の総合テーマ「低年齢児の保育と環境について」に基づく3件の保育科学研究が現在進行中であるが、これらの研究要旨を特集として掲載した。

3つ目は、10月27日(水)に配信された【日本保育協会オンライン全国研修大会】内で、「保育科学研究発表」と五十嵐隆先生による特別講演（「子どもの感染症」）が行われたので、その概要を掲載した。令和3年度も新型コロナウイルス感染症感染拡大の影響により、「学術集会」の開催を中止したが、本研修大会において「保育科学研究発表」を行い、会員に広く保育科学研究所事業を知っていただく機会としたものである。

なお、令和4(2022)年度研究の総合テーマは、今年度に引き続き「低年齢児の保育と環境について」とし、5件の研究が予定されている。

令和4年度の「学術集会」についてであるが、新型コロナウイルス感染症が収束していないため、集合形式の開催は難しい状況が続くが、11月現在、国民の7割超が2回のワクチン接種を完了したこともあり、実施に向けた検討を引き続き進めていきたいと考えている。

## もくじ

|                                                                               |           |
|-------------------------------------------------------------------------------|-----------|
| 1. はじめに .....                                                                 | 1         |
| 2. 保育科学研究所所長就任あいさつ.....                                                       | 五十嵐 隆 … 2 |
| <b>—特集：令和3年度研究テーマ・要旨—</b>                                                     |           |
| 3. 乳児期の食事場面における子どもの心地よさを支える<br>ための要因に関する研究<br>—子どもと保育者の関係性構築のプロセスに着目して— ..... | 淀川 裕美 … 4 |
| 4. 3歳未満児における保育内容の評価に関する研究<br>—人的環境・物的環境・言語環境の研究から見えて<br>きたものを土台として— .....     | 岩橋 道世 … 5 |
| 5. 保育施設等の日常の感染症対策と感染症拡大防止策<br>の評価と課題に関する研究.....                               | 菅原 民枝 … 6 |
| 6. 日本保育協会オンライン全国研修大会での保育科学<br>研究発表等について(報告).....                              | 7         |
| 7. 第15回「保育実践研究」入賞作一覧.....                                                     | 11        |

---

## 保育科学研究所所長就任あいさつ

---



この度、日本保育協会保育科学研究所所長を拝命いたしました、国立成育医療研究センター理事長の五十嵐 隆と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

保育には、地域や国の文化に基づく子育てに関する習慣や経験と、子どもや子育てをする保護者への深い愛情が基本です。

一方、教育学、保健学、医学などの科学的知見が、保育の様々な分野を支援しています。

当研究所は、保育に関する科学的事実を探求し、実証的研究を行うと共に、様々な批判や支援を受けてブラッシュアップした知見を広く保育関係者に提供し、保育と保育環境の充実を目指すことを目的とします。

わが国では、保育に関する科学的研究活動は他の分野の研究活動に比べてこれまでは活発ではありませんでした。研究者の数が少ないこと、保育実践者が保育に関する研究に参画する余裕がないことなどがその主な理由と

考えられます。わが国は、現在人口構成が19世紀型から21世紀型に移行する途中段階にあります。2020年の出生数は約84.1万人で、1973年の第二次ベビーブーム以降、ほぼ一貫して出生数は減少の一途にあり、2021年の出生数は約78.4万人に減少することが予想されています。少子化が進んでゆくわが国の保育のあり方について、保護者の要望も大きく変化しています。このような状況の中で、子どものこころと体の健全な育成をめざす保育の役割や、そのあり方についても大きな変革が求められています。質の高い保育科学研究の必要性が、今こそ増してきていると考えられます。昨年からの新型コロナウイルス感染症の流行が、保育科学の研究活動にも大きな阻害因子となっています。しかしながら、このような時期にあっても、保育科学の質の高い研究を是非とも推進して戴きたく、会員の皆様をお願いする次第です。なお、研究活動を実施する上での課題などについての会員からの御相談にもできるだけ適切に対応する所存です。遠慮なく事務局に御連絡頂きたく存じます。

世界保健機関（WHO）は、1988年に「健康とは身体的、心理的、社会的に良い状態」と定義しています。2020年に子どものアドボカシーを研究するユニセフの研究機関であるイノチェンティ・リサーチ・センターは、経済的に豊かな38カ国の子どもの身体的、心理的、社会的健康状態の順位付けを発表しました。わが国の評価は、身体的健康度は世界一でしたが、心理的健康度は37位でした。

わが国では、10歳以上の子どもや青年の自殺が死因の第一位を占めるなどの事実がこの様な評価に繋がっているものと推測されます。2021年の内閣府の国あたり20-50歳の約千人に対する「少子化に関する国際意識調査」で、「子どもを産み育てやすい国と思う」とする割合は、わが国は38%程で、スウェーデン、フランス、ドイツに比べ大変に低い数字でした。子育て世代に対する国からの支援が圧倒的に少ない状況を反映した結果と推測されます。

保育にとってこれから期待される国の施策も出てきています。成育医療等に的確に対応するために、関連する保健、教育、福祉に関する施策と連携し、総合的に推進することを目指す「成育基本法」が2019年から施行され、2021年には具体的項目を示した「成育医療等基本方針」が閣議決定されました。さらに、小児保健や医療の課題を解決する事を目的に、子どもの保健・医療・福祉・教育などの施策を一括して担当する国の組織として「こども庁」を2022年に新設することが決められまし

た。「成育基本法」と「こども庁」が機能することで、これまで実現できなかった子どもに関する施策が進展することが期待されます。「成育基本法」では、子どもの健康に関する様々な研究活動を推進する事がうたわれています。保育科学研究を更に発展させることが私ども保育関係者の責務であることを強く認識したいと思います。

### 【五十嵐先生プロフィール】

東京大学医学部小児科教授、東京大学医学部附属病院副院長を経て、現在は国立成育医療研究センター理事長を務める。小児腎臓病学を専門とする。

当協会においては、平成28年より理事。同年より保育科学研究所運営委員を務める。

令和3年7月より保育科学研究所所長に就任。

### 研究会員の募集について

保育科学研究所では、日本保育協会会員の他、研究会員（個人）として入会し、研究活動を行うことが出来ます。

「研究紀要（年1回発行）」や「研究所だより（年3回発行）」の送付の他、「研究所だより」への投稿、「保育実践研究」への応募が可能です。その他、学術集会（年1回開催）での研究発表（運営委員会承認後）の機会も設けております。

年会費は5千円で年度ごとの受付です。詳細は企画情報部（03-3222-2114）までお問い合わせください。

# 特集：令和3年度研究テーマ・要旨

乳児期の食事場面における子どもの心地よさを支えるための要因に関する研究  
—子どもと保育者の関係性構築のプロセスに着目して—

淀川 裕美

＜研究代表者＞

淀川 裕美（千葉大学准教授）

＜共同研究者＞

酒井 治子（東京家政学院大学教授）

會退 友美（東京家政学院大学助教）

林 薫（白梅学園大学准教授）

志賀口大輔（なごみこども園園長）

渡邊 高幸（松が丘保育園園長）

池谷真梨子（和洋女子大学助教）

伊藤 優（就実短期大学講師）

## 【研究の目的】

本研究は、0歳児クラスの「食事時間における子どもの心地よさ」に着目し、0歳児クラスの担任保育士が子どもと安心できる関係を築き、子どもの心地よさを生み出していくプロセスについて、入園から半年間の保育者の声から明らかにすることを目的としている。

## 【方法】

本調査では、保育所1園と認定こども園1園の0歳児クラス担任保育士（各2名）、0歳児クラスのクラスリーダー（各1名）、調理担当者（各1名）、主任保育士（各1名）に協力して頂き、アンケート調査とインタビュー調査を実施した。調査の協力者、調査の種類、回数及び時期は表1の通りである。いずれも調査計画では4月に開始予定であったが、新年度当初であることとコロナ対応が重なり、協

力園に負担をかけぬよう5月開始に変更した。

## 【調査内容と研究結果の見込み】

表1 調査の概要

| 協力者     | 調査の種類  | 回数（時期）       |
|---------|--------|--------------|
| 保育士     | アンケートA | 2回（5月・9月）    |
|         | アンケートB | 毎月（5月～9月）    |
|         | インタビュー | 3回（5月・6月・8月） |
| 調理担当者   | アンケートA | 2回（5月・9月）    |
|         | アンケートB | 毎月（5月～9月）    |
|         | インタビュー | 3回（5月・6月・8月） |
| クラスリーダー | インタビュー | 2回（5月・9月）    |
| 主任      | インタビュー | 2回（5月・9月）    |

担任保育士には、アンケートを2種類とインタビューを実施した。アンケートAでは、調査開始時と終了時に（5月と9月の2回）、担任保育士のもつ0歳児クラスの食事観や職員間の連携について尋ねた。また、アンケートBでは、毎月（5月から9月の5回）、担当している園児の生活全般や食事について具体的に尋ねた。インタビューは、調査開始直後の5月と6月、8月に実施し、最近1ヶ月の子どもの食事の様子、クラスの同僚と共有していること等を尋ねた。

調理担当者にも同様に、アンケート2種類とインタビューを実施した。アンケートAでは、調査開始時と終了時に（5月と9月の2回）、調理担当者のもつ0歳児クラスの食事観や職員間の連携について尋ねた。また、アンケートBでは、毎月（5月から9月の5回）、担当している園児の様子の把握や職員間の連携、家庭の食事の様子の把握等について具体的に尋ねた。インタビューは、調査開始直後の5月と6月、8月に実施し、食事で工夫していること、保育士と話し合ったこと、食事提供で感じるやりがい等について尋ねた。

クラスリーダーには、インタビューを調査開始時と終了時の2回（5月と9月）実施し、

調理担当者との連携、0歳児クラスの食事へのクラスリーダーとしての思いなどを尋ねた。

主任には、インタビューを調査開始時と終了時の2回（5月と9月）実施し、調理担当者との連携、食事に関する園の文化や歴史、今後の園での子どもたちの食事への思いについて尋ねた。

上記に加えて、食事場面の映像を月に一回ずつ（5月～9月）撮影して頂き、さらに、食事場所の写真、食事の写真、離乳食カレンダー、食事に関するエピソードを資料として収集した。

現在、データ収集を終え、最終報告書作成に向け、データの分析を行なっている。本年度は、収集したデータのうち、園児の食事の経験や保育士との関係性をプロセスに焦点をあて描出することを目指している。各園で保育士と園児を1組ずつの選出し、園児の食事の姿が時間の経過とともにどのように変容し、保育士が園児の食事の難しさをどのように受け止め、保育士がそれに応じてどのように対応や工夫をしていったかを描出することで、0歳児クラスの入園当初の一人ひとりの食事の経験のプロセスを質的に分析している。

なお、本年度の調査でデータを収集できた0歳児クラスの食事に関する職員間の連携については、本年度は取り上げられないため、今後の研究課題として取り組みたいと考えている。

（千葉大学准教授）

### 3歳未満児における保育内容の評価に関する研究

—人的環境・物的環境・言語環境の研究から見えてきたものを土台として—

岩橋 道世

<研究代表者>

岩橋 道世（こども園るんびにい副園長）

<共同研究者>

北野 幸子（神戸大学大学院准教授）

矢藤誠慈郎（岡崎女子大学教授）

菊地 義行（境いずみ保育園理事長）

只野 裕子（こども園あおもりよつば園長）

福澤 紀子（つるた乳幼児園園長）

永田 久史（第二聖心保育園園長）

平山 猛（さざなみ保育園園長）

青木恵里佳（子供の家愛育保育園副園長）

田和由里子（春日こども園園長）

筒井 桂香（もとしろ認定こども園園長）

椋沢 幸苗（中居林こども園理事長）

坂崎 隆浩（こども園ひがしどおり理事長）

東ヶ崎静仁（飯沼こども園理事長）

### 【研究の目的】

3年間やってきた「保育環境・物的環境（おもちゃ等）・人的環境（言語環境）等」を踏まえ、これらの3分野を中心に、アンケート及び研究結果から見えてきた保育に欠かせない評価ポイントを抽出し、その抽出理由を明確にする。

### 【内容・方法】

- ①上記の評価ポイントの他に各分野に関連した保育の評価基準を検討し、新たなポイントとして項目を加え評価範囲（基準）を膨らませる。
- ②保育指針、教育・保育要領を参考に再度確認検討し、項目内容を整理作成する。
- ③協力園に②で作成した評価項目を実施してもらい、その結果を踏まえ改善し、保育現場で活用できる3歳未満児における保育内容の評価基準を作成する。
- ④協力園に評価シートを実施してもらい、アンケートに答えてもらう。
- ⑤評価シートやアンケートを分析、考察する。  
（こども園るんびにい副園長）

## 保育施設等の日常の感染症対策と 感染症拡大防止策の評価と課題に 関する研究

菅原 民枝

<研究代表者>

菅原 民枝 (国立感染症研究所 主任研究官)

<共同研究者>

大日 康史 (国立感染症研究所 主任研究官)

### 【研究の概要】

日常の衛生管理については、日本保育協会が実施する感染症研修会ならびにプレ研修会の受講者、協力自治体の保育施設の保育者、日本保育協会の『保育界』の読者を対象として自記式無記名WEBアンケート調査を行った。目標回収数は、およそ1000保育園としているが、現在も実施している。現在、目標回収数のおよそ9割の回答結果を得ることができている。

### 【調査内容】

調査内容は日常の衛生管理のポイント①手洗い、②場所・物品の消毒等（トイレ、おむつ替え、テーブル、保育室等の床、嘔吐処理、遊具）及び消毒薬（次亜塩素酸ナトリウム、次亜塩素酸水、アルコール、逆性石けん、その他）、及び消毒剤の保管や利用（スプレー噴霧や作り置き等）③施設内危機管理（サーベイランス、感染症対策委員会の設置等）について尋ね、それらの必要性（あるいは不必要性）を理解したうえで見直し、改善したかどうかとした。

### 【今後の方向性】

現在、一部調査中であるが、集計を行ったのち、下記の分析を行う。衛生管理の実施は、手洗いの状況（手指消毒、ペーパータオルの

利用、おてふき等）、トイレの状況（スリッパ、パンツ脱着台、手すり、手洗い場等）、おむつ交換場所の状況（マット・タオル利用、手順、使い捨て消耗品の利用、おしり洗いの実施、おむつの保管方法等）、施設内の場所（テーブル、保育室の床、嘔吐処理、遊具）の衛生管理を評価し、施設特性は、市町村名、職員の人数（規模別）、看護師の有無及び人数、施設状況（換気等）及び施設内危機管理で検討する。感染症拡大防止策では、自治体で公表されている新型コロナウイルス感染症の事例から、保育園で発生した場合を想定して、初発例の症状の有無、積極的疫学調査、濃厚接触者等についての理解などとした。衛生管理の実施有無と自己評価をした後の見直しと改善の関連も検討する。新型コロナウイルス感染症の流行状況の動向も兼ねて、分析を予定している。

(国立感染症研究所 主任研究官)

---

# 日本保育協会オンライン全国研修大会での 保育科学研究発表等について(報告)

---

## 本研修大会開催の経緯

当協会保育科学研究所では例年、「学術集会」を開催し、前年度に実施した研究の発表、基調講演等を行ってきた。

しかしながら令和2、3年度は、新型コロナウイルス感染症感染拡大防止のため、この開催を中止せざるを得なかった。

当協会についても「保育を高める研究集会」、「全国理事長・所長研修会」の2つの大会の開催を2年連続中止した。そこで、それらに代わる大会事業として「日本保育協会オンライン全国研修大会」を開催し、その中で「保育科学研究発表」の時間を設け、会員の皆様に当協会保育科学研究所の事業について知っていただく機会とすることとなった。

## 本研修大会の概要

「日本保育協会オンライン全国研修大会」は、令和3年10月27日(水)10時～16時30分に、YouTube Liveとzoomを使用し、配信した。

本研修会への申込みは、約1,000施設。当日の配信の最高視聴数は600施設を超えた。

なお、本研修大会は、11月1日(月)から22日(月)まで再配信を行った。

## 保育科学研究所とその事業について

「保育科学研究発表」は13時～14時30分に配信された。プログラムは全て事前収録とした。

西村重稀先生(仁愛大学名誉教授、当協会保育科学研究所運営委員)をコーディネーターに迎え、以下の令和元年度研究5件と令和2年度研究(菅原先生の研究)1件の計6件の研究発表を行った。

西村先生には、冒頭、当協会保育科学研究

所の成り立ち、各事業の状況を以下のようにご説明いただいた。



当保育科学研究所の設立は1971(昭和46)年に保育所保育の調査研究や保育用品の改良研究等を行うために創設され、2年後の1973(昭和48)年に当協会が社会福祉法人に改組した際、協会の附属機関となった。その後休止状態となったが、2003(平成15)年保育士登録制度の施行により、保育士の専門性向上について考えるという機運もあり、2004(平成16)年に再スタートさせた。2005(平成17)年12月には「日本学術会議協力学術研究団体」に加入が認められた。

保育科学研究所の事業として、運営委員会で承認された毎年5、6ヶ所の研究グループに補助を行い、年内で研究を実施してまとめ、報告書をご提出していただいている。これが今回発表する「保育科学研究」という。また、報告書は研究紀要としてまとめている。

もう一つの事業として「保育実践研究」がある。当協会会員に対し、日々の保育を振り返り、検証・研究していただくというもので、毎年『保育界』4月号より募集を開始し、11月中旬までにご提出いただいている。応募作は保育実践研究企画審査委員会が評価を行い、4つの賞を決め表彰している。

その後、以下の研究発表が行われ、発表後

には西村先生よりそれぞれの研究への講評をしていただいた。

最後に西村先生から「一人でも多くの会員の皆様に保育科学研究や保育実践研究にご参加いただきたいこと、当研究所も発表の場を広めるとともに、今後も保育現場で活かすことができる研究を行っていきたい」との発言があった。

## 保育科学研究発表

令和元、2年度ともに研究テーマは「低年齢児の保育と環境について」である。

以下に各研究の発表概要を記す。

※数字以降研究名、所属先、発表者名と発表時写真。

### ①乳児保育の3つの視点と3歳未満児の5領域のねらい及び内容を反映した保育に関する研究 仁愛大学 森俊之先生



平成29年に改定された保育所保育指針等の3歳未満児の保育に基づく研修、指導計画等の作成、保育の実践のほか、保育の内容を充実させるための取り組みの現況を明らかにすることを目的とする研究を行った。

研修が多いほど、指導計画等を変更する者の割合が高かったり、多くの者が研修を受けていて、その内容を理解し、指導計画や保育実践に繋げているものの、研修を受けていない、あまり理解できていないものがある者が一定数存在することがわかった。

研修機会が多いほど理解が深まり、実践等に繋がっているという調査結果から、今後更なる研修機会の必要性があることがわかった。

### ②低年齢児保育における動的環境の検討

海老名市立わかば学園 庄司亮子先生



平成29年に改定された保育所保育指針等では、1歳以上3歳未満児の「健康」に関するねらいと内容において、低年齢児が自発的に身体を動かす機会を充実させ、感覚運動発達を支える重要性を示している。

この研究では、低年齢児の運動スキルの実態を明らかにし、先行研究と比較して、現代の子どもの感覚運動発達の育ちについて検討した。また、保育における動的環境の検討も行った。

運動スキル調査から、つま先歩き（2歳児項目）、でんぐりがえし（3歳児項目）の通過率が低いことが分かった。遊びの実態では、押す・引っ張る動きの要素が含まれる遊びのバリエーションが少なかった。

### ③低年齢児の食事場面での保育者の援助と環境構成に関する研究

千葉大学 淀川裕美先生



平成29年の指針改定で養護に関する基本的事項の記載が総則に格上げされた。個別性の高い食事の援助はその一環で象徴だが、集団保育の現場で一般化するのには人的・動的



環境を含め課題がある。

食事のはじまりを経験する0歳児クラスの子どもにとって「心地よい食事の場」となるためには具体的にどのような環境構成や援助が求められるのかを検討する。

多くの保育者が子どもの嬉しそうな様子や主体的に食事をする姿から「心地よい」と認識している。たくさん食べる子や、子どものペースで食べる子については心地よさとして認識していない。

研究が3園のみの結果だったことから更なる検討を必要とし、食事場面における子どもの心地よさが生まれていくプロセスを多層的に検討する必要がある。

#### ④人的環境としての保育者の語彙力と子どもの育ちの関係性についての研究

こども園るんびにい 岩橋道世先生



2017年から3歳未満児の教育について研究している。2017年は人的環境、2018年は動的环境。2019年は社会的（言語）環境とし、保育集団の中の保育者との関わりが言語発達に与える影響の検証を行った。

14園の0～3歳未満児クラスの保育者にままごと遊び等の共通の保育課題を行ってもらい、その様子を撮影した。その時の言葉かけ量と内容、子どもの発する言葉の量と内容等を検証した。

言葉を獲得していない0歳から言語行動に移行していく2歳児に保育者の言葉かけを通して言葉を獲得していることが分かった。語彙力を広げるためには、0歳からの保育者との言葉のやり取りと積み重ねが重要である。

#### ⑤集団保育における1、2歳児の生活習慣形成に関する研究 文教大学 松田典子先生



生活習慣の中でも、靴の着脱に着目した。靴の着脱は、様々な幼児の発達の指標にも用いられている。これらからは、目安として、およそ2歳頃までに靴を脱ぐ、3歳頃までに靴を履くがおおむね習得できることが示されている。子どもの発達や環境によって、子どもの靴の着脱にどのような違いがみられるのか明らかにし、靴の着脱ができるようになるまでの特徴を捉え、環境の与える影響を考察した。

その結果、子どもの発達の違いだけでなく、物的・人的環境によって違いが出る可能性があるかと推察された。今後は、この保育環境の違いが着脱行動にどのような影響を与えているのかより多くのデータを集めて検証していく必要がある。

#### ⑥乳幼児の集団生活の場における感染症対策と保育環境の衛生管理に関する研究

国立感染症研究所 菅原民枝先生



体力、免疫力の低い乳児が集団生活を行う保育園は、濃厚接触の機会が多いため、感染症にかかりやすく広がりやすい。保育園は集

団感染を防ぐことや二次感染などの感染拡大防止に切り替えて行動することが求められる。また、日常の衛生管理が有事対応に繋がる。

2018年に実施した感染症対策研修会受講者への修了後調査で消毒薬の取り扱いについての疑問を多くもっていることが分かった。それは、各園独自の使用方法があるためと考える。

保育園の感染症対策でテーブル、床、おむつ支援場所、トイレの消毒はどう行っているのか、日常の衛生管理の適切な対策がどのように行われているか、という消毒に関する認識に着目し、実態を明らかにする調査を行った。

清掃と消毒の違い、成分表示の確認、噴霧に関する健康被害の注意喚起を強く行う必要性があり、ガイドラインについても管理運用方法について新たに記述が求められる内容があることが分かった。これらを改定し、注意喚起する必要がある。

今回発表を行った研究は当協会ホームページにそれぞれの全文が掲載されているので、参照されたい。

研究紀要『保育科学研究』

<https://www.nippo.or.jp/laboratory/bulletin.html>

機関紙『研究所だより』

<https://www.nippo.or.jp/laboratory/journal.html>

## 特別講演「子どもの感染症」について

本研修大会では、当協会保育科学研究所所長の五十嵐隆先生が、国立成育医療研究センター理事長として「子どもの感染症」についての講演を行った。

日本の令和元年度乳児死亡率は1.9、新生児致死率は0.9で、子どもの身体的健康は世界一レベルである。しかし、WHOの健康の定義は、身体面に加えて、心理精神面、社会面でも全てが満たされた状態であることとされており、日本では特に精神面での健康が



OECD（38カ国）の中でも下から2番目の順位であるほど低い（2020年）。

心理・精神面での課題はあるが、感染症による損害は少ない。それは子どもの予防接種が推進されたからだ。子どもは出生直後、母親からもらった抗体により、風邪などにかかりにくいのが、成長と共にその抗体は減少する。加えて細胞性免疫が未熟のため感染症にかかると重症化しやすい。乳幼児が過ごす保育園等では様々な感染症に罹患するため、ワクチンで予防できる感染症は接種することで防ぐべき。子どもの予防接種スケジュールは適切な時期に接種するための重要な方針だ。これを無視して子どもに接種させないことも国民の自由と考えるのは誤りだ。免疫異常や宗教上の理由がある以外の大多数の子どもは、自身の健康のためにもぜひ接種してほしい。

新型コロナウイルス感染症は、現在二類感染症相当の「指定感染症」に分類されている。飛沫・接触感染により発症するがウイルスの感染力はそれほど強くないと言われていた。ところが、デルタ株は感染力が極めて強い。感染予防として三密を避ける、マスクの着用、手洗いと手指消毒、共有部分の消毒といった対策が効果的だ。子どもが新型コロナウイルスに感染しても重症化することはまれである。ただ、デルタ株の流行後は小児の感染者が増加しているため、注意が必要だ。保育園等は引き続き適切な感染症対策に努めるとともに、保護者は定期予防接種と健診を奨励していただきたい。（文責 事務局）

## 第15回「保育実践研究」入賞作一覧

### ○最優秀賞

該当なし

### ○優秀賞

#### ・課題研究部門①人とのかかわり

子どもとの関係性の変化 ー宇宙への興味の広がりを通してー  
橘 南、浅香 聡彦（石川県・大徳学園）

#### ・課題研究部門②遊びと学び

日常保育を大切にした行事の実践 ー発表会の改革を通じてー  
荒井 祐子（千葉県・布佐宝保育園）

#### ・自由研究部門

食事に課題がある子どもの取り組み  
坂本 向子（福岡県・青葉やまと保育園）

### ○研究奨励賞

#### ・自由研究部門

雪の体験を思いっきり楽しもう!!  
辺見 智子、小野寺 敦子、林 佳枝、山本 佳奈恵（北海道(研究会員)・旭川認定こども園）

つぶやきから広がる豊かな表現 ～食育体験から生まれた“とうもろこしのうた”～  
村岡 里美、秋葉 悦子、佐藤 美里（山形県・山形認定こども園）

Aくんの“わくわく”がみんなの“わいわい”になった環境構成を振り返る  
西垣 浩康（岐阜県・黒野こども園）

### ○奨励賞

#### ・課題研究部門②遊びと学び

5歳児における試行錯誤の過程 ～コロナ禍での新たな運動会に向けての取り組みから～  
平瀬 文恵（富山県・射水おおぞら保育園）

#### ・自由研究部門

『お泊り保育』を通して子ども主体の行事を考える  
富田 真由（東京都・砂原保育園）

地域の良き由縁・良き心配りの保育協力は保育の彩り  
花城 千枝子（沖縄県・ひよどり保育園）

### 第8期日本保育協会保育科学研究所運営委員

五十嵐 隆 … 保育科学研究所所長、国立成育医療研究センター理事長  
石川 昭 義 … 仁愛大学教授  
内田 伸 子 … お茶の水女子大学名誉教授  
大方 美 香 … 大阪総合保育大学学長  
椛 沢 幸 苗 … 青森県・社会福祉法人恵泉会理事長  
小林 芳 文 … 横浜国立大学名誉教授・和光大学名誉教授  
酒井 治 子 … 東京家政学院大学教授  
清水 益 治 … 帝塚山大学教授  
新保 雄 希 … 石川県・泉の台幼稚園園長  
高木 麻 里 … 神奈川県・長岡こども園園長  
高橋 紘 … 至誠保育福祉研究所研究員  
西村 重 稀 … 仁愛大学名誉教授

### 第2期日本保育協会保育科学研究所企画委員

五十嵐 隆 … 保育科学研究所所長、国立成育医療研究センター理事長  
椛 沢 幸 苗 … 社会福祉法人恵泉会理事長  
新保 雄 希 … 石川県・泉の台幼稚園園長  
高木 麻 里 … 神奈川県・長岡こども園園長  
西村 重 稀 … 仁愛大学名誉教授

### 第6期日本保育協会保育科学研究所倫理委員会委員

伊 澤 昭 治 … 神奈川県・五反田保育園園長  
内田 伸 子 … お茶の水女子大学名誉教授  
酒井 治 子 … 東京家政学院大学教授  
普光院 亜 紀 … 保育園を考える親の会代表  
森 山 幹 夫 … 健康科学大学特任教授

### 第3期日本保育協会保育科学研究所審査委員

五十嵐 隆 … 保育科学研究所所長、国立成育医療研究センター理事長  
内田 伸 子 … お茶の水女子大学名誉教授  
小林 芳 文 … 横浜国立大学名誉教授・和光大学名誉教授  
清水 益 治 … 帝塚山大学教授  
西村 重 稀 … 仁愛大学名誉教授

### 第9期「保育実践研究」企画・審査委員

天 野 珠 路 … 鶴見大学短期大学部教授  
石川 昭 義 … 仁愛大学教授  
小林 芳 文 … 横浜国立大学名誉教授・和光大学名誉教授  
高木 早智子 … 埼玉県・花園第二こども園園長  
田 和 由里子 … 広島県・春日こども園園長  
馬 場 耕一郎 … 大阪府・社会福祉法人友愛福祉会理事長  
日 吉 輝 幸 … 石川県・平和こども園園長

※敬称略。50音順

## 日本保育協会保育科学研究所『研究所だより』第35号

2021年12月8日

発行者：五十嵐 隆

発行所：社会福祉法人日本保育協会 保育科学研究所

〒102-0083 東京都千代田区麴町1-6-2-6F

TEL：03-3222-2111 / FAX：03-3222-2117

(1,200)